

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00806

研究課題名(和文) コーパス分析に基づく英語法助動詞と法副詞の研究と英語教育への応用

研究課題名(英文) A corpus-based study of English modal verbs and adverbs for pedagogical purposes

研究代表者

藤本 和子 (Fujimoto, Kazuko)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：20350499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：助動詞や副詞は、話し手や書き手の物事に対する態度を表現する上で重要な役割を果たすが、EFL/ESL学習者が言語の使用場面や目的に応じて適切に使い分けることは難しいとされる。そこで本研究では、一般英語コーパスと学習者コーパスの分析により、確信の度合いを表したり主張を和らげたりするために用いられる助動詞と副詞について、日本人英語学習者の使用の特徴を分析した。得られた結果をもとに、学習者の言語使用に学習者のL1や教材が影響を与えていることを指摘した。さらに、学習者が助動詞と副詞の用法について理解を深め、フォーマリティの違いに応じて使い分けができるよう、指導内容や教材の改善点を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外において、学習者の助動詞や副詞の使用についてのコーパス基盤型研究の結果に基づく指導内容の提示や教材開発への提案が期待されている。本研究において、一般英語コーパスと学習者コーパスの分析に基づき、日本人英語学習者の確信度や丁寧さを表す助動詞と副詞の使用の特徴をつかみ、指導内容と教材の改善点を提示したことは、英語教育、そしてグローバル社会に生きていく日本人英語学習者の実践的コミュニケーション能力向上のために貢献するものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Modal verbs and adverbs play an important role in expressing the speaker's or writer's attitude towards things, but it is difficult for EFL/ESL learners to use them appropriately for the purposes and situations of language use. This study investigated the characteristics of Japanese EFL learners' use of modal verbs and adverbs to express the degree of certainty or to soften their assertions. Based on our findings from the analysis of general English corpora and learners' corpora, we have pointed out the influence of students' L1 and teaching materials on their language use. Suggestions have been made for improving the teaching content and developing teaching materials so that learners can deepen their understanding of the use of modal verbs and adverbs and use these modal expressions according to differences in formality.

研究分野：英語学、英語教育

キーワード：英語法助動詞 英語法副詞 学習者コーパス コーパス言語学 言語教育のための英文法 学習指導要領

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成30年に告示された高等学校学習指導要領には、外国語科の5つの領域(聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表])のうち、話すことと書くことの目標には、「情報や考え、気持ちなど」の伝達について繰り返し述べられている。これらの伝達には、助動詞や副詞が大きな役割を果たす。確信度や丁寧さを表す助動詞や副詞の適切な使用は、効果的なコミュニケーションにつながる。

助動詞や副詞は、意味用法が多様であることもあり、学習者の意味用法別の使用傾向の調査の研究は十分になされておらず、さらに、助動詞や副詞などのモダリティ表現のコーパス基盤型研究成果の教材開発への応用は遅れており、教科書や教材にも十分な記述がなされていないことが指摘されている。

このような背景により、一般英語コーパスと学習者コーパスの分析に基づき、日本人英語学習者の確信度や丁寧さを表す助動詞と副詞の使用の特徴を調査し、これらのモダリティ表現の指導内容と教科書などの教材の改善点を提示することにより、日本人英語学習者の実践的コミュニケーション能力の向上につなげる必要があると考えるに至った。

2. 研究の目的

モダリティ表現である助動詞や副詞は、物事に対する話し手、書き手の態度を表し、コミュニケーションにおいて重要な働きをする。しかしながら、これらのモダリティ表現を言語の使用目的や状況に合わせて適切に使用することは、EFL/ESL 学習者には難しいとされる。本研究では、一般英語コーパスと学習者コーパスの分析結果に基づき、日本人英語学習者の助動詞、副詞の使用の特徴をつかむ。そして、学習者の言語使用の要因について、英語学の知見と第二言語習得理論をもとに、母語の影響や従来の指導法、教材との関係などの観点から考察する。さらに、確信度や丁寧さを表す助動詞と副詞の指導内容と教材の改善点の提案をする。これらのことにより、グローバル社会に生きる日本人英語学習者の実践的コミュニケーション能力向上に貢献することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者、研究分担者1名、研究協力者1名で行った。研究協力者の英国ランカスター大学教授 Willem Hollmann 氏から言語理論および調査項目の意味カテゴリーやコーパス用例分析などについて研究助言を得た。コーパスデータの分析には、専門的な統計処理が不可欠であるため、統計学を専門とする岡山理科大学教授黒田正博氏が研究分担者として、データ分析方法などの専門知識の提供およびデータの統計分析を担当した。

以下の方法で本研究を進めた。

(1) 助動詞の意味カテゴリーや助動詞と副詞の調査項目を、Quirk et al. (1985)、Declerck (1991)、Biber et al. (2021)などを参考にして決めた。話し手、書き手の確信度や丁寧さに関係する「可能性」「必然性」などを表す助動詞と副詞を中心に、一般英語コーパスと学習者コーパスを分析した。一般英語コーパスは、主に Brown Family of Corpora、Corpus of Contemporary American English などを用い、学習者コーパスは、既存のコーパス(Longman Learners' Corpus など)と研究代表者が日本人大学生のライティングデータから作成したコーパス(JSPS 科研費 25370654)を分析した。このコーパスは、アカデミックライティングコースにおいて、収集したもので、学生の属性、習熟度、課題内容、課題作成条件等が明確であることに加え、使用した教科書と学習者の言語使用の関係も調査分析することができる。これらのコーパス分析の結果に基づき、日本人英語学習者の助動詞と副詞の使用の特徴をつかみ、その要因について、英語学の知見と第二言語習得理論をもとに、母語の影響、従来の指導法や教材との関係などの観点から考察した。

(2) 高等学校英語教科書や国内外の主要な学習者用辞典における助動詞と副詞についての説明内容や記述を調査分析した。教科書における助動詞の扱いについては、すでに作成していた高等学校教科書コーパスのうち、主に「コミュニケーション英語」(JSPS 科研費 25370654)のデータを分析した。これは、教科書占有率の高い複数の教科書から作成したコーパスである。

(3) 一般英語コーパスと学習者コーパスの分析結果に基づき、モダリティ表現である助動詞と副詞について、指導内容と教科書などの教材の改善点を提示した。

4. 研究成果

(1) 根源的(root)意味の“strong obligation”と認知的(epistemic)意味の“epistemic necessity”を表す MUST と HAVE TO について、Smith (2003)などの話し言葉と書き言葉コーパスの分析結果と比較しながら、日本人英語学習者の使用の特徴を分析した。学習者コーパスは、Longman Learners' Corpus の Advanced レベルの学習者のエッセイサブコーパスを用いた。先行研究において、学術的文章では、MUST のほうが、HAVE TO よりも頻度が高く、会話では、MUST よりも HAVE TO のほうが頻度が高いことが報告されている。日本人英語学習者のエッセイでは、MUST よりも HAVE TO のほうが多く使用され、話し言葉の特徴が見られた。同様の特徴が、日本人英語学習者の HAVE TO の文法形態の使用にも見られた。現在分詞、過去分詞や不定詞のような HAVE TO の非定形などの一般英語コーパスでは話し言葉よりも書き言葉のほうによく見られる構造を、日本人学習者は十分に使用していない。このことから、日本人英語学習者の HAVE TO の使用における形態のバリエーションが少ないことも考えられる。MUST と HAVE TO の意味の使用の比較では、日本人英語学習者は、一般英語コーパスの書き言葉に見られるように、認知的意味よりも根源的意味で多く用いている。ただし、HAVE TO の根源的意味での使用は、話し言葉において、より顕著であることから、学習者のライティングで話し言葉を用いる傾向と関係がある可能性がある。日本人英語学習者の HAVE TO の認知的意味での使用は 0 件であった。日本人英語学習者がこの意味用法をどの程度習得しているかについては、今後の調査が必要である。これらのことに基づき、学習者に書き言葉と話し言葉の違いや、言語表現のフォーマリティの違いを指導することの重要性と、これまでのコーパス基盤型先行研究の成果を英語指導に生かしていくことの必要性などについて論文で発表した。

(2) “Obligation/necessity”を表す助動詞や半法助動詞のうち、本研究では、*should* について、学習者コーパス Longman Learners' Corpus の Advanced レベルの日本人英語学習者のエッセイサブコーパス(LLC_JE)と American English 2006 (AmE06)、British English 2006 (BE06)の学術的文章サブコーパス(AmE06_L、BE06_L)、AmE06 の一般的散文サブコーパス(AmE06_GP)を用いて、日本人英語学習者の *should* の用法の使用の特徴を分析した。さらに、高等学校英語教科書における *should* の扱いの一端を知るために、高等学校学習指導要領(2009年3月告示)に基づく教科書のうち、必修科目「コミュニケーション英語」の5種類の教科書中の本文から作成したおよそ 36,000 語のコーパスを分析した。9つのコア助動詞(*can, could, may, might, must, shall, should, will, would*)の頻度を見ると、LLC_JE には、AmE06_L や AmE06_GP と異なる助動詞の使用パターンが見られる。つまり、AmE06_L、AmE06_GP と比較して、LLC_JE では、*should* の頻度が顕著に高く、かつ根源的意味で用いられ、認知的意味をもつ *should* は見られなかった。*Should* を認知的意味で用いることにより、学習者は必然性の度合いを伝えることができるため効果的なコミュニケーションに役立つ。認知的意味の指導も重視したい。「コミュニケーション英語」の教科書における *should* の頻度は、AmE06_GP と比較して、5社の教科書のうち3社が、AmE06_GP の調整頻度を超えている。今後の課題として、教科書において、特定の助動詞が過剰に提示されていないか、各教科書の3年間を通しての詳細な分析も必要である。これらのことについて論文で発表した。

(3) アカデミックライティングにおいて、*may, might, could* のような「認知的可能性」を表す助動詞を用いることにより、書き手は断定的な主張を避けることができる。本研究では、アカデミックライティングコースを履修した CEFR A2、B1 レベルの日本人大学生のライティングにおけるこれらの助動詞の使用を分析した。一般英語コーパスは、American English 2006 (AmE06_L) と Corpus of Contemporary American English を用いた。コーパス分析の結果、「認知的可能性」の意味での *may* と *might* については、日本人大学生コーパスと AmE06_L との間に有意な差は見られなかったが、「認知的可能性」を表す用法の *could* の使用頻度は有意に低い。日本人大学生は、*could* を「過去の能力」の意味でかなり頻繁に使用し、誤用も見られることから、*could* は日本人学習者にとって特に問題をもつことがわかった。大学生が *could* を頻繁に使用する要因として、L1 の影響と日本人大学生が授業で用いたライティングの教科書が提示するトピックが関係する可能性がある結論づけた。日本語の「できた」と *could* は、その意味する範囲が異なる。日本人学習者には、特に *could* の用法の指導に焦点をあてる必要があるだろう。また、アカデミックライティングの教材は、レジスターに適した言語表現を提示する必要がある。これらのことについてまとめた共著論文を国際ジャーナルに掲載した。日本人英語学習者とりわけ CEFR A2、B1 といったレベルの学習者の助動詞の使用の研究が期待される中で、本研究の国内外の学習者コーパス研究への貢献は大きいと考える。

(4) 頻度を表す副詞 *sometimes, usually, always* などの断言を避けるための用法については、Halliday & Matthiessen (2014) などでも論じられているが、この用法が教育英文法において扱われることはほとんどない。モダリティ表現としての頻度を表す副詞について学習者に指導す

ることは、学習者が物事に対する態度を効果的に表現するために有益であると考えられる。本研究では、頻度の段階性をもつ4つの副詞、*sometimes*、*often*、*usually*、*always*について、一般英語コーパス American English 2006 と British English 2006 の学術的文章のサブコーパス (AmE06_L、BE06_L) と学習者コーパス Longman Learners' Corpus (LLC) の日本人英語学習者のエッセイデータを分析した。AmE06_L と BE06_L のいずれにおいても、これら4つの副詞の使用頻度は、*often* が第1位であり、第1位と第2位以下との頻度の差が大きい。日本人学習者は、*always* の使用頻度が高く、学術的文章で用いられる頻度が高い *often* の使用順位が低い (学習者全体で第3位)。習熟度レベルで4つの副詞の頻度の順位を見ると、Advanced レベルは、*often* の使用頻度が第1位であり、これは、その他のレベルの学習者と異なる点である。しかし、第1位と第2位以下の副詞との頻度の差が小さく、AmE06_L、BE06_L と異なる特徴をもつ。日本人英語学習者のアカデミックライティングの指導において、頻度を表す副詞の断言を避ける用法についての学習者の理解の促進と、話し言葉と書き言葉というレジスターに応じた英語表現の提示を提案する。今後、アカデミックライティングの教材においても、適切な言語表現の提示や、書き言葉と話し言葉における言語使用の違いに関する説明記述の充実も必要である。これらのことについて論文で発表した。

< 引用文献 >

- Biber, D. et al. 2021. *Grammar of spoken and written English*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Declerck, R. 1991. *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M. 2014. *Halliday's introduction to functional grammar* (4th ed.). Oxford: Routledge.
- Quirk, R. et al. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. Harlow: Longman Group Limited.
- Smith, N. 2003. Changes in the modals and semi-modals of strong obligation and epistemic necessity in recent British English. In R. Facchinetti, M. Krug, & F. Palmer (Eds.), *Modality in contemporary English* (pp. 241-266). Berlin: Mouton de Gruyter.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 8件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Hollmann, W. B., Fujimoto, K., & Kuroda, M. | 4. 巻 14(1) |
| 2. 論文標題 Japanese EFL undergraduate students' use of the epistemic modal verbs may, might, and could in academic writing | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Language Learning in Higher Education | 6. 最初と最後の頁 21-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/cercles-2023-0014 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 47(2) |
| 2. 論文標題 「仮定法現在とshould - 英英辞典の用例を見る - 」 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 67-82 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 46(2) |
| 2. 論文標題 「助動詞shouldの指導について 日本人英語学習者のライティングから見えるもの 」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 35-49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 46(1) |
| 2. 論文標題 「Collins COBUILD English Usage第4版に見る現代英語と現代社会の変化」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 1-13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 45(2) |
| 2. 論文標題 「Shouldとought toの違いについて "obligation"の意味をめぐって」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 1-15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 45(1) |
| 2. 論文標題 「アカデミックライティングにおける日本人英語学習者のMUSTとHAVE TOの使用について」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 1-15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 44(2) |
| 2. 論文標題 「アカデミックライティングにおける日本人英語学習者の頻度を表す副詞の使用について」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 1-13 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 藤本 和子 | 4. 巻 44(1) |
| 2. 論文標題 「Garner's Modern English Usage第4版に見る現代英語の諸相」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『英語英文学研究』 | 6. 最初と最後の頁 1-15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 藤本 和子 |
| 2. 発表標題 「仮定法現在それともshould? 日本人大学生アカデミックライティングにおける指導について考える」 |
| 3. 学会等名 JAECS語彙SIG研究会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 藤本 和子 |
| 2. 発表標題 「日本人英語学習者の頻度を表す副詞の使用について」 |
| 3. 学会等名 JACET英語語彙研究会 2021年度研究大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kazuko Fujimoto |
| 2. 発表標題 "Epistemic modal verbs and adverbs in Japanese university students' academic writing" |
| 3. 学会等名 The 10th International Corpus Linguistics Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|---------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 黒田 正博 (Kuroda, Masahiro) (90279042) | 岡山理科大学・経営学部・教授 (35302) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | ホールマン, ウィレム (Hollmann, Willem) | ランカスター大学・言語学・英語学科・教授 | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|----------|--|--|--|
| 英国 | ランカスター大学 | | | |